



# RINDAS

The Center for the Study of Contemporary India, Ryukoku University

龍谷大学現代インド研究センター

RINDAS 伝統思想シリーズ 18

## ガンディーとジャイナ教 その思想交流

藤永 伸

RINDAS 伝統思想シリーズ 18

ガンディーとジャイナ教 その思想交流

藤 永 伸



## ガンディーとジャイナ教 その思想交流

藤 永 伸

### 始めに

現在のインドの人口は12億人以上と見積もられるが、宗教に従って分類すればジャイナ教徒は約0.4%、人数にして500万人足らずの少数派である<sup>1</sup>。しかし、その歴史は古く、釈尊在世当時には既に多くのジャイナ教徒が存在していた。また、その活動領域は単に宗教面のみならず、文学や美術などあらゆる方面に及んでいる。ヒन्दゥー教、仏教と並んでインド亜大陸固有文化の源泉である。即ちジャイナ教は少なくとも2500年以上、インドで連綿として活動している文化体系といえる。

現在のインド社会での影響力も決して小さくない。商業面での勢力は伝統的であるが<sup>2</sup>、文化面でもジャイナ教徒の活動は見逃せない。例えば、モティラール・バナラシダスはジャイナ教徒が経営する現代インドを代表するインド学関係の出版社で100年以上の伝統をもつ。

### 古典文献でのジャイナ教教義

本稿の主目的はガンディーとジャイナ教との思想交流であるから、時代的には現代の事柄が対象となる。しかし、ジャイナ教は今述べたように古い伝統を持ち現在まで存在する文化体系であるから、現在の教義や行動は背景に長い歴史があることは容易に理解されるであろう。ここでは、初期のジャイナ教の思想を倫理的側面から概観する。

### 不殺生と不所有および断食死<sup>3</sup>

現在まで続くジャイナ教思想の基本を作ったのはマハーヴィーラと敬称で呼ばれる人物で、釈尊とほぼ同時代にほぼ同地域で活動した。つまり、今から約2500年ほど前にガンジス川中流域（現在のビハール州を中心とする地域）に生存した人である。彼の思想は多岐にわたるが、倫理的側面すなわちどのように行動すべきかを論じる分野に限れば、五つの項目にまとめることが出来る。すなわち1) 不殺生、2) 不妄語、3) 不偷盗、4) 不邪淫、および5) 不所有の五つである。ここではその一々の内容には立ち入らないが、これらは現在のジャイナ教徒の行動規範の原点であり、特に出家者は厳密に守っている。さて、最初の不殺生は仏教でも重要視されている行動規範であり、基本的には「生き物を殺害しないこと」であるが、ジャイナ教と仏教との差異は「生き物」の範囲をどのように考えるかであると思われる。マ

1 [http://censusindia.gov.in/Census\\_And\\_You/religion.aspx](http://censusindia.gov.in/Census_And_You/religion.aspx)参照。

2 例えば大谷幸三「ジャイナ教徒、賢者の金融道」(『カイラス』vol. 2所収) 参照。

3 以下、ジャイナ教の思想に関してはWiley, K. L.; *Historical Dictionary of Jainism. Historical Dictionaries of Religions, Philosophies, and Movements, No. 53.* Lanham Maryland Toronto Oxford 2004の各項目によった。

ハーヴィーラによれば生き物は可動者、不動者、水、火、地、風の六種類である。つまり、彼は現在の我々が想定する動植物以外に、水や火も命を持っていると考えたのである。これは現在でもジャイナ教徒が持っている生物観である。従って、不殺生という行動規範を守る際に、ジャイナ教徒は単に、動植物を傷つけないようにするだけではなくて、水や火をも殺害しないように留意している。

不所有は文字通りものを持たないことであるが、これも不殺生と同じく厳密に行うことがジャイナ教の特徴と思われる。マハーヴィーラは出家後2年ほどして、全ての着衣を捨て、その後は裸形を続けたとされる。つまり、衣類でさえも所有しない行動を取ったのである。マハーヴィーラ以後のジャイナ教出家者は基本的に衣類をまとわなかったが、早い段階で着衣を認める人々が現れた。前者を空衣派（文字通りには「空気」を衣とする者）と呼び、後者を白衣派と呼ぶ。今日もこの二派がジャイナ教の二分派と見なされている。また、後者の分派としてスターナカヴァーシーと呼ばれるグループがある。

この不殺生と不所有から必然的に導かれるのが、断食であり、更に突き詰めて行くと断食死である。我々は生命を維持するために外部からの物質を取り入れる、つまり食事をしなければならないが、摂食は必ず何らかの生物の命を奪わざるを得ない。また、食物を自己の体内に取り入れる事は所有の一形態である。不殺生と不所有の規則に従うならば断食しなければならぬ。また断食を継続して行けば死に至るはずである。伝承によれば実際にマハーヴィーラは数多くの断食を行っている。即ち、日々二食を基本とすれば、一日一食、一日断食、二日断食し三日目に一食するなどである。そして、解脱に至る際には断食によって死を迎えている。そして彼以後のジャイナ教では断食は苦行の一種として広く実践され、断食死も理想的な末期とされている。

さてマハーヴィーラの時代にはジャイナ教の活発な地域はガンジス川流域であった。その後インド亜大陸全体に広がって行き、とくに西インドへ広がり、特に現在のグジャラート州カティヤワール半島にはかなりのジャイナ教徒が活動していたと思われる。その根拠の一つとしては、西暦5世紀に白衣派聖典の結集が行われるが、その場所が現在のカティヤワール半島の付け根に位置するヴァッラビーであった。

それ以降、インド西部、現在のグジャラート州とラジャスターン州はジャイナ教が社会で重要な役割を果たしてきた。最も有名な例は西暦11、2世紀のヘーマチャンドラとクマラーパーラ王であろう。後者は前者の影響で王国をジャイナ教の教義に従って統治したといわれる<sup>4</sup>。それ以後のイスラム教支配下でも、ジャイナ教徒は主に商人として西インドで重要な役割を果たした<sup>5</sup>。

しかし、西暦18世紀頃になると、社会的勢力も衰え、教団内部でも正式な出家者がなくなり、主導権を握るのは半僧半俗の集団（白衣派ではヤティ、空衣派でバッターラカ）である。

---

4 両者の関係は多くの書物で扱われているが、例えばDudas, P.; *The Jains* (2nd edition) London, New York 2002: 134-136ページ参照。

5 ムガル朝におけるジャイナ教徒の活動は小名康之『ムガル帝国時代のインド社会』（世界史リブレック111）山川出版社、2008: 40-41ページに簡潔な説明がある。

### ジャイナ教からガンディーへ

マハートマ・ガンディー、本名、モハンダース・カラムチャンド、ガンディー（以下ガンディーと略す）は周知のように、西暦1869年10月2日にインド西部、カティヤワール半島の港町ポールバンダルで、ヒンドゥー教の家庭に生まれている。80年余りの人生で彼はジャイナ教そのものや特定のジャイナ教徒から多大の影響を受けている。特に社会の前面に出る以前の若きガンディーの思想形成にはジャイナ教が与って少なからぬものがあった。一方、イギリス帝国を相手に独立運動を展開する過程で多くの国民に多大な影響を与えたことは「インド建国の父」と呼ばれる事から容易に推測されるが、ジャイナ教徒も例外ではなかった。以下ではガンディーとジャイナ教とのいわば相互交流を見て行きたい。

前者、即ちガンディーがジャイナ教から受けた影響は比較的知られている。それは彼の著作の中で最も広く読まれていると思われる所謂『自伝』の数カ所で言及されているからであろう。ガンディーがジャイナ教から受けた影響は大きく分ければ、イギリス留学直前の1888年以前のもの、およびインド帰国から南アフリカ移住の1893年前後の二つである。

ガンディー自身が述べているように彼が生まれ育ったグジャラート州カティヤワール地方はジャイナ教の勢力が強く、かつヒンドゥー教やイスラム教など複数の宗教が共存している社会である。それは単に共存しているばかりではなく、混淆していると呼んだ方がいいほどであり、ガンディー家にとってジャイナ教は他のヒンドゥー教の家庭より影響が大きかったようである。ガンディーが次の様に述べている。

「ジャイナ教の僧侶らもしばしば父を訪問していたし、ジャイナ教徒ではない我が家から乞食を受けていた。また父とは宗教的な話題も世俗のことも話していた」<sup>6</sup>

このようにジャイナ教の影響はガンディー一家全体に及んだが、ガンディー個人の運命を決める事にもなる。父の死後、ガンディーにイギリス留学の話が持ち上がる。彼自身はどうにかして留学しようと思うが、母親は息子が異国へ行き、肉食などの悪い習慣に染まることを心配してなかなか同意しようとしないう。周囲に相談するが気持ちをまとめることが出来ない。そこで彼女はベチャルジーと言う人物に助言を求める<sup>7</sup>。

「ベチャルジー師は本来モード・ヴァニヤの出であったが、当時はジャイナ教の出家者になっていた。ジョーシジーと同様に我が家の助言者であった。彼は私に加勢してくれて、こう言った〈この子に誓いを三つさせよう。そうすれば行ってもいいだろう〉。彼が誓戒式を取り仕切り、私は酒と女性と肉に触れないことを誓った。これをおこなったので、母は許可をくれた」<sup>8</sup>

ベチャルジーの好意的な助言がなければ、母親はガンディーのイギリス留学に同意することはなかっただろうし、ガンディーも母親に反対してまで留学しようとはしなかっただろう。そしてこの誓いが、イギリス留学中のみならず、ガンディーの生涯にわたって生活の基本的な信条となったであろう事も推測される。因みにこのベチャルジー・スヴァーミーなる僧侶がどのような人物であったかは、上の記述以外には明らかではないが、ジャイナ教白衣派の

6 Gandhi, M. K. ; *An Autobiography or The Story of My Experiments with Truth*. Ahmedabad 1927（以下『自伝』と略す）24ページ。Navjivan Trust; *The Collected Works of Mahatma Gandhi*. Ahmedabad 1958-（以下『全集』と略す）44巻、116ページ。

7 「スヴァーミー」は尊称か。英文では大文字で記されている。

8 『自伝』28ページ。『全集』44巻、121ページ。

一支派であるスターナカヴァーシー派に属していたと考えられる。

さて、ガンディーは自伝の中で彼に影響を与えた同時代人を3人あげている。ロシアの文豪トルストイ（1828-1910）、イギリスの著述家ラスキン（1819-1900）そして、ラーイチャンド（1867-1901）である。以下ではラーイチャンド（彼の名前は様々に綴られ、ガンディーによる表記も一定しないが、本稿ではラーイチャンドと呼ぶ事にする）がガンディーに与えた影響を見て行く事にする。

ガンディーが2歳年上で同じカティヤワール半島出身のラーイチャンドと出会ったのは、イギリスから帰国した1891年ボンベイである。ラーイチャンドはヒンドゥー教徒の父親とジャイナ教徒の母親の間に生まれた。（このような結婚は、多いとはいえないがグジャラートでは珍しくない）であるから、完全なジャイナ教徒とはいえないかもしれないが、ガンディー以上にジャイナ教の影響の強い家庭で育った。幼児期からその秀でた才能は有名で、かつ宗教的にも優れた洞察力と表現力を有し、20歳になるまでに多くの著作を著した。しかし、出家者とはならず宝石商を営む傍ら、瞑想によってアートマンの本質をつかむ修行を行った。つまり18世紀以降、ジャイナ教内部で起こった在家者中心の宗教活動の流れを汲み、また同時期から盛んになる神秘主義的傾向を引き継いでいる。ガンディーとラーイチャンドの交友は后者の早すぎる死まで約10年間続く。またこの10年の間、ガンディーは大半を南アフリカで過ごしているから、両者をつなぐのは多くが手紙のやり取りであった。さてラーイチャンドはどれほどガンディーに影響を与えたのであろうか。自伝によれば、

「これまで多くの宗教指導者や説法者 [teacher] に会ってきたし、色々な宗派の長に会おうとしてきたが、ラーイチャンドほどの印象を与えた者はいなかった。彼の言葉は私の心に響いた。その知性とまじめさには大いに尊敬せざるを得なかったし、深く確信したのは彼が決して私を迷わせる事はないし、奥深い思想を明かしてくれているという事であった。それゆえ、精神的な危機に陥った時は彼が拠り所であった」<sup>9</sup>

ガンディーは様々な困難に行き当たると、各方面の著名な宗教家や思想家も手紙を書き、返事をもらっていた。しかし、ラーイチャンドからの答えが彼を最も満足させたようだ。ラーイチャンドは「魂への洞察、慈悲という点でヒンドゥー教ほど繊細で奥深い宗教はないと確信している」と書送っている<sup>10</sup>。

ここでいうヒンドゥー教とは狭義ではなく、ジャイナ教も含めたものを指していると考えられる。

さて実際にガンディーはどのような質問をし、それに対してラーイチャンドはどのように答えたのであろうか。現在、ガンディーが書いた手紙は残存していないが、ラーイチャンドからの返信が3通知られており、その中の1通、1894年10月20日付けのものから質問内容を知る事が出来る。それによればガンディーは30近い項目について尋ねている。「靈魂とは何か、解脱とは何か」等である。その最後で彼は次の様な問いを發する。

「もし、蛇が私をかもうとしているとき、取るべき唯一の対処法として噛まれるままにすべきか、それとも殺してしまうべきか」<sup>11</sup>

9 『自伝』65ページ。『全集』44巻、157ページ。

10 『自伝』102ページ。『全集』44巻、193ページ。

11 『全集』1巻、142-143ページ。答えとも『全集』36巻、500-509ページ。特に最終ページ。

これに対してラーイチャンドは答える、

「蛇に噛まれるままにすべきだと答えるのは躊躇されます。しかし、身体は消滅する事を理解しているあなたにとって、何の価値もない体を守るために、それに執着している動物を殺すのは正しいことでしょうか。精神の豊かさを求める者にとって、そのような状況では身体を減びるがままにしておくのが最善です。しかし精神の豊かさを求めない者はどうすべきでしょうか。これに対して答えうるのは〈地獄などを経験するであろう、つまり蛇を殺すであろう様な人物には何も助言できない〉ということです。アーリア人的文化を持たない人には蛇を殺せと助言できるでしょう。しかし、貴君にせよ小生にせよそのような人間であることなど夢にも思いたくないですね」<sup>12</sup>

後年のガンディーの行動を考えると、また既に述べたラーイチャンドへの傾倒を考慮すると、ここにあげたラーイチャンドの考え方がガンディーに少なからぬ影響を与えたともあまり間違いではあるまい。例えば、ガンディーが南アフリカやインドで設立した組織で、ヘビなどの爬虫類を殺さないという規則があったことから知られる<sup>13</sup>。

ラーイチャンドはガンディーの質問に返事を書くことによって助言を与えているが、ジャイナ教の文献を紹介したり、実際に送ったりしてより深い理解を促している。ラーイチャンドが送ったジャイナ教関連の書籍として、現在確認できるのはハリバドラの『六派哲学集成』*Ṣaḍdarśanasamuccaya*だけである<sup>14</sup>。ガンディーに贈られたものがどのような版であったかを彼の記述からは明らかではないが、一般に在家者はサンスクリットでは読まないこと、本文だけでは簡便すぎるなどからして、マニバドラによる注釈*Laghuvṛtti*のついたヒンディー語訳ではなかったかと思われる。

ここでガンディーがジャイナ教に関してどのような文献を読んでいたかを確認しよう。生涯にわたるガンディーの読書内容を知ることは不可能であるが、1893年以降は宗教書が中心になった<sup>15</sup>。特に様々な政治活動を行い投獄されると、格好の読書時間が確保できた。1922年に逮捕されイエーラヴダYeravda監獄に投獄された際もかなりの書物を精力的に読んでいる。この投獄の際に読んだ本の一覧と日記が残されているが、膨大な量の書籍の内、ジャイナ教に関するものは1) *Syādvādamañjarī*、2) *Uttarādhyāyana Sūtra*および3) *Bhagavatī Sūtra*である<sup>16</sup>。このうち、1)は所謂論書でジャイナ教以外の哲学思想を批判し、自教の正当性を述べた作品である。一方、2)は聖典の中で根本聖典と呼ばれるジャンルに属し、広範囲のジャイナ教教義を扱っている。また3)も聖典文献でアングに分類される。内容はマハーヴィーラの行状や宇宙論など多岐にわたっているが、歴史的にはかなり古い内容を伝えていると考えられる。これら3冊の書物からガンディーがどのような思想を読み取り、どのような影響を受けてたかは不明である。また原典を直接読んだのか、それとも英語やヒンディー、グジャラーティーの翻訳を使ったのか分からない。が、少なくともジャイナ教の原典に親しみ、直接的な知識を得ようとした事は確かである。

12 『全集』36巻、509ページ。

13 『自伝』324ページ。『全集』44巻、410ページ。

14 『自伝』102ページ。『全集』44巻、193ページ。

15 『全集』29巻、87ページ。

16 一覧は『全集』29巻、88ページ、日記は『全集』26巻、441ページ以下、特に450ページ。

## ガンディーからジャイナ教へ

以上のようにガンディーは特定の個人を通して、また文献を通して、更にはジャイナ教徒の集団的行動などの見聞をとおしてジャイナ教から多大の影響を受けた。一方、反英国運動、独立運動の指導者としてインド国民へ影響を与えたことは衆知の事実である。ジャイナ教徒も例外ではない。特にインド西部のラジャスターンやグジャラートのジャイナ教徒は親近感が他地域よりも強かったのであろう、様々な階層の人物がガンディーを慕い共感し、共に行動している。ここでは幾人かの人物を取りあげ、ガンディーからの影響をみることにする。

ジャイナ教徒を区分する一つの方法として、出家者と在家者とに分けるやり方がある。前者はジャイナ教社会で指導者的役割を果たすが、実際の行動は制限される。在家者は比較的自由に行動できるが、ここでは一般の在家者とパンディットと呼ばれるジャイナ教の研究と教育を専門とする人々とに分けて考えてみる。

ガンディーから影響を受けたジャイナ教出家者で最も有名でかつ重要な人物はジナヴィジャヤJinavijaya (1888-1976) であろう。ジナヴィジャヤは一度出家してから還俗しているので、厳密な意味ではジャイナ教の僧侶とはいえないが、ガンディー自身が彼をムニと呼んでいるし<sup>17</sup>、自身もジナヴィジャヤという名前を後年まで使っているので出家者として扱う<sup>18</sup>。

彼はラジャスターンのルパヘリRupaheliに生まれたが、1899年に父が死ぬと、白衣派の一分派であるスターナカヴァーシーの僧侶として1903年15歳で出家した。しかし、1910年に白衣派の尊像崇拜派でムニ・ジナヴィジャヤとして二度目の出家をした。彼の学僧としての能力は多くの面で知られるが最も著名なものはシンギー・ジャイナ・グランタマーラーSinghi Jain Granthamālā叢書の創設と編集であろう。そのようジナヴィジャヤがどうしてガンディーの影響を受けるようになったのか。ジャイナ教の出家者は雨季の四ヶ月は遊行せずに一定の場所に定住する。仏教でいう雨安居である。1920年の雨安居でプーナ滞在中にジナヴィジャヤはローカマンニヤ・ティラクLokamanya Tilak (1856-1920) やジャイナ教徒のアルジュンラール・シェーティーArjunlal Śeṭhī (1880-1941) など国民運動の指導者と親交を結んだ。その時、ジナヴィジャヤは出家者集団を離れこの運動に積極的に加わりと決心した。この時点で僧侶としての戒律を放棄したようである。即ち、ジャイナ教の出家者は移動の際にはほぼ徒歩で移動するが、ジナヴィジャヤは鉄道を利用するなどの行動をとり始めている。ガンディーと共にボンベイへ汽車で移動し、更にアーメダバードへ赴いている。そしてガンディーが設立したグジャラート・ヴィドゥヤー・ピーットGujarat Vidyā Pīṭhで古典学部門の教授として活動する。その後、インドを訪れた多くのドイツ人インド学者と会い、1928年にはヘルマン・ヤコービの招きでジナヴィジャヤはヨーロッパに遊学し、ドイツに赴きボン、ハンブルグ、ライプチヒの諸大学（当時のインド学、特にジャイナ教研究の中心地）で学び、西洋式の研究方法を身につけた。この時の所見をガンディーに報告している。

1929年末にインドに帰国すると、翌年にガンディーの要請で「塩の行進」に参加するメンバーの一員となった。しかし、このことで逮捕され、ナーシクNasikの牢獄に収監された。そして10月に出獄するまで獄中で約6ヶ月をすごした。その後、ベンガルに移りシャンティ

17 『全集』68巻、260ページ参照。

18 以下ジナヴィジャヤの事跡に関しては主にJinavijaya; *Jīvan kathā*. Ruaheli 1971およびWiley上掲書「JINAVIJAYA」の項を参照した。

ニケータンで教鞭をとるなどしている。ジナヴィジャヤがガンディーと行動を共にしたのは、現在確認できる範囲では10年ほどであるが、出家生活を放棄し「塩の行進」に参加するなど、ガンディーの思想と行動に強く共感し彼の運動に深く関与していることがわかる。数多くのジャイナ教徒がガンディーの影響を受けている事は想像に難くないが、ジナヴィジャヤはその最たる人物といえるであろう。

彼以外にガンディーからの影響を受けたジャイナ教出家者としては白衣派尊像崇拜派のタパーガッチャの尼僧。ムリガーヴァティー・マハッター Mṛgāvātī Mattarā (1926-1986)、空衣派の出家指導者アーチャールヤ・ヴィドゥヤーナンディン Ācārya Vidyānandin (1925-)、白衣派スターナカヴァーシーの学僧ムニ・サントゥバル Muni Santbāl (1893-1982) などが知られている。

次にジャイナ教在家者でガンディーからの影響を受けて人物を見て行くが、特にパンディットと呼ばれる人々を取り上げたい。パンディットという語がどのような人物を指すかはジャイナ教内部でも時代と場所によって様々であるが、ここでは「伝統的な方法で教育を受け、属する宗派の聖典を研究するもの」<sup>19</sup>と理解する。

20世紀初頭から多くの優れたパンディットが生まれ、ジャイナ教研究のみならずインド古典学全体に多大の寄与をなすが、その内の一人がベチャルダース・ドーシー Becardās Doshi (1889-1982) である<sup>20</sup>。ドーシーはグジャラートのヴァッラビプル Vallabhipur に生まれ、近隣のジャイナ教教育機関（パートシャーラー）で基礎教育を受けた。その後、ベナレスに遊学しパンディットのハルゴーヴィンダース・シェート Hargovindās Sheth のヤショーヴィジャヤ・ジャイナ叢書の編集を手伝う。1914年にニヤーヤティールタ Nyāyatīrtha とヴィヤーカラナティールタ Vyākaraṇatīrtha の試験に合格すると、スリランカ（セイロン）にパーリ語と仏教の勉強のために赴いた。1915年にはグジャラートに戻ると、バローダの東洋学研究所に招聘されるがこれを断り、ガンディーが設立したグジャラート・ヴィドゥヤー・ピートに奉職する。ドーシーは白衣派のアーガマをグジャラートに翻訳しようと試みたが、主流の出家者とそれに従う在家者から多くの抵抗にあった。いわばジャイナ教内の改革を試みたのであるが、ジャイナ教社会から一時的ながらも追放される。この問題に関して、ガンディーはドーシーを支持し「自らの立場に確信を持っているなら真理を放棄すべきではない」と述べている<sup>21</sup>。1921年にはパンディット スクラール・サンガヴィー (1880-1978。サンガヴィーもガンディーの影響を受けた人物で一時期はサバルマティ アシュラムで生活していた) と協同して『サンマティ・タルカ・プラカラナ』 *Sammati-tarka-prakarana* の校訂出版を手がけた。この仕事は7年ほどの歳月をかけて行われるが、現在でも高く評価されおり日本で再版されインドに逆輸入されている。出版当てもガンディーが称賛をあたえたという<sup>22</sup>ほどの名編集である。さて1930年にガンディーが「塩の行進」で逮捕されると彼が編集していたグジャラートの雑誌「ナヴジーヴァン」 Navjīvan の編集を引き継いだ。これが罪に問われイギリ

19 Wiley上掲書の当該項を見よ。

20 以下、ドーシーの事跡について Dhaky, M. and Jain, S. (ed.); *Pam. Becardās Doṣī Smṛti Granth*. Varanasi 1987 および Wiley 上掲書を参考にした。

21 Dhaky, M. and Jain, S. 上掲書(2)ページ。『全集』では未確認。

22 Doshi, B.; *Samgīti*. Ahmedabad 2003. 11ページ。『全集』では未確認。

ス官憲により逮捕された。そして英国領から追放され、グジャラートの隣州であるラジャスタンに移らざるを得なかった。1936年にこの禁令が解かれると、アーメダバードに戻り研究と教育に従事した。彼の教えを受けた者の中には、上に述べた尼僧ムリガーヴァティーがいる。

ドーシーがガンディーから大きな影響を受けていたことは、逮捕および追放の危険が事前に予知されていたにも関わらずガンディーの助力をしたことから窺える。またガンディーもドーシーの才能を評価していることは上に挙げた事実から理解される。彼がたぶんイエラヴダ監獄からドーシーに宛てた1通の手紙があるが、その中でガンディーはドーシーの眼病を気にかけて専門家にかかるように奨めている<sup>23</sup>。

ドーシー以外にガンディーの影響を受けたと思われるパンディットは、既に言及したサンガヴィーやダルスック・マルヴァニア（1910-2000）、およびマヘンドラクマール・ジャイン（1911-1959）などがある。彼らはいずれもジャイナ教文献のみならずインド古典の研究で輝かしい成果を挙げている。その理由は、彼ら個々人の優れた資質が最も大きいと思われる。しかし、隠れた要因として、ガンディーが提唱し実行した思想と運動、一個の独立した主体としてのインドを回復することから受けた影響があると推測される。国家としてのみならず、文化体系としても西洋に劣らない独立した内容をインドが有していること、それをパンディットたちは文献の出版として示したのではないだろうか。彼らの殆どは自らの思想をヒンディー語やグジャラーティー語で述べているためにインド以外ではあまり識られていない。しかし、ガンディーとの関係においても、またインド学研究の歴史を知る上でも軽視できない人々である。

#### 今後の課題

上に言及したパンディットらはガンディーとジャイナ教の関係について論文を発表している。例えば、マルヴァニアは3本の論文でガンディーを論じている。これらを研究することでジャイナ教とガンディーとの関係をより深く知ることが出来よう。またガンディーはジャイナ教の存在論であるアネーカーンタヴァーダにも言及し、高く評価している。更に西インドのジャイナ教徒が行う社会活動としてパンジャラポールの設立と運営がある。パンジャラポールは動物保護施設である。これもガンディーが支持しており、不殺生思想の具体化の例として研究に値すると思われる。また今回はジャイナ教在家者に与えたガンディーの影響については言及しなかった。有名な例としては、心理学者エリクソンが分析しているアーメダバードの財閥ヴィクラマサラバイとガンディーの関わりが有名である。その他にも多くのジャイナ教在家者がガンディーの影響を受けていることは想像に難くない。これらが今後の課題として残っている。

---

23 『全集』50巻、31ページ。



RINDAS 伝統思想シリーズは、人間文化研究機構現代インド地域研究推進事業の出版物です。

人間文化研究機構 (NIHU) <http://www.nihu.jp/sougou/areastudies/india.html>

NIHUプログラム現代インド地域研究 (INDAS) <http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/>

龍谷大学現代インド研究センター (RINDAS) <http://rindas.ryukoku.ac.jp/>

RINDAS 伝統思想シリーズ 18

「ガンディーとジャイナ教 その思想交流」

藤永 伸

---

2014年6月30日発行 非売品

発行 龍谷大学現代インド研究センター  
〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1  
龍谷大学白亜館4階  
TEL : 075-343-3813 FAX : 075-343-3810  
<http://rindas.ryukoku.ac.jp/>

印刷 河北印刷株式会社  
〒601-8461 京都市南区唐橋門脇町28  
TEL : 075-691-5121

---

ISBN 978-4-904945-51-3